

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 9月 12日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻
氏 名 松尾 朗子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Asian Association of Social Psychology 2017 Conference アジア社会心理学会 2017年大会
公式ホームページ URL	http://auckland.asiansocialpsych.org/
開催期間	2017年 8月 26日 ~ 2017年 8月 28日
旅行期間	2017年 8月 24日 ~ 2017年 8月 30日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	New Zealand · Auckland · Massey University Albany Campus ニュージーランド・オークランド・Massey 大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松尾 朗子 ¹ ・唐沢 穎 ¹ ・Vinai Norasakkunkit ² (¹ 名古屋大学環境学研究科, ² Gonzaga University 心理学部)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Can we “accurately” interpret the immorality?: Cultural bases for shared representations of morality (「我々は道徳違反を正確に解釈できているか? : 文化的共有知としての道徳」)
補助金額	8万円 (内訳: 名古屋-オークランド間の旅費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

申請者は、2017年8月26日～28日にニュージーランドで開催されたアジア社会心理学会2017年大会に参加し、シンポジウムにて口頭発表を行った。内容は以下の通りである。

【シンポジウム全体の内容】

道徳判断、つまり、それが正しいまたは間違っているとする判断がどのように行なわれているのかについての研究は、近年では心理学の様々な分野で急速に進んでいる。特に社会心理学の分野においては、自分自身や他人の行動についての直感的な道徳判断に関する知見が蓄積されてきている。これらの知見は、道徳判断における通文化性や文化差を明らかにするものである。本シンポジウムの目的は、現在進んでいる最先端の道徳研究を報告し、このトピックにおけるこれからの方針を議論することであった。

【申請者の発表内容】

道徳判断は個人内で完結する過程ではなく、その判断基準を他の集団員と共有することで文化的生存に影響するという社会的機能が指摘されている(Haidt, 2011)。ある文化に生きる人々は道徳判断の基準について、経験的に、他の員たちがどのような場面でどのように判断するのかを手がかりに理解するとされる。しかし、同一文化圏に生きる人々が、どのような場面においてどのような判断基準を用いて道徳判断を行い、それが共有されていくのかに関する実証研究は非常に乏しい。そこで本研究は、自文化と他文化において、道徳判断が必要とされる状況を抽出した上で、それらの状況において自身の文化圏内の他者と同様の道徳判断ができるのか、また、自文化での道徳判断状況でその判断がより正確に行われるかどうかをボトムアップ的に実証することとした。

本研究の結果から、日本人が、日常的な道徳違反状況において、自文化で重視される道徳的観点の違反に関しては他の観点に比べて共有の度合いがより高いことと、他文化で生じる状況と比べて自文化で生じる状況に関してより正確に（道徳的常識に従って）解釈できることが示された。本研究により、従来の道徳研究が提唱してきたように、人々が理論に沿った道徳的観点を根拠に善悪判断をしていることだけではなく、新たに、自文化に合った道徳的観点が道徳的常識として機能していることが示された。さらに、他文化に比べ自文化内で生じる道徳判断状況に対する解釈が異なるという結果は、理論上は生じ環境に関わらず解釈の正確さに差はないと思われていた道徳判断に関する比較文化研究の分野に全く新しい知見を提供するものである。

【成果】

発表に関して、オーディエンスから有益なコメントや建設的なご意見をいただき、自分では考えたことのない切り口の可能性に気付かされた。国際学会における口頭発表の経験はあるがシンポジウムという形では初めてだった申請者にとって、今回の発表は分野内での自身の研究の位置づけを考える貴重な機会であった。同じシンポジウム内の他の発表者は初対面であったが、お互いに研究成果を報告しあい発展的な課題も議論でき、最先端の研究成果やこれからの方向性も共有できた。これからまた海外の研究者と共同研究を行っていきたいと考えているので、海外でのコネクション拡大は有益な経験であった。自身の発表以外でも、会期中は毎日ポスターセッションやシンポジウムを回り、アジアにおける社会心理学分野の動向を知ることができた。社会心理学においては欧米の研究が目立ちがちだが、アジアでしかできないような研究はまだまだあるのだと感じた。

今学会を通して、様々な研究者と交流する機会を得た。社会心理学におけるアジアの存在感を目の当たりにし、自分が研究する意義を再確認できたように思う。このような貴重な機会を与えていただき、貴学会に厚く御礼申し上げる。この経験を活かし、より一層研究に精進する所存である。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 8月 10日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 徳島大学大学院医科学教育部
氏 名 武田 知也



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 45th BABCP Annual Workshops and Conference (The 45th British Association for Behavioural and Cognitive Psychotherapies Annual Workshops and Conference)
公式ホームページ URL	http://babcpconference.com/
開催期間	2017年7月25日～2017年7月28日
旅行期間	2017年7月24日～2017年7月28日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland · Manchester · Manchester University (グレートブリテン及び北アイルランド連合王国・マンチェスター・ マンチェスター大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	武田知也 ¹⁾ , 中瀧理仁 ²⁾ , 大田将史 ²⁾ , 濱谷沙世 ¹⁾ , 松浦可苗 ³⁾ , 大森哲郎 ²⁾ 1)徳島大学大学院医科学教育部、2)徳島大学大学院医歯薬学研究部 3)徳島大学病院精神科神経科・心身症科
発表題目 ※正式名と日本語訳	The effect of negative thoughts on QOL in patients with schizophrenia (統合失調症者における否定的認知がQOLに及ぼす影響)
補助金額	80,000円（内訳 宿泊・航空費の一部に使用させていただきました）

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたび「日本心理学会」より国際学会へのトラベルアワードをいただき、イギリスのマン彻スターで開催された The 45th British Association for Behavioural and Cognitive Psychotherapies Annual Workshops and Conference (BABCP)に参加させていただきました。参加した際に、体験したことや学んだことをご報告いたします。

私は、統合失調症の陰性症状や抑うつ症状と脳機能（構造的・機能的画像、認知機能など）や否定的な自己に関する認知との関連を研究しております。今回の研究では、陰性症状や抑うつ症状を統計的に統制しても、否定的な自己に関する認知が統合失調症のクライエントの生活の質 (Quality of Life: QOL) と有意な関連を持ち、横断的ではありますが、彼らの QOL の向上に関して、否定的な自己に関する認知を介入ターゲットとするとの重要性をポスターで報告してきました。イギリスでは、統合失調症に関する臨床心理学的研究が盛んであることもあり、多くの研究者の方に発表にお越し頂き、拙い英語ではありますが、交流をはかることができました。交流を通して、統合失調症への介入もしくは研究で中心となっているのは、陽性症状に対するものであり、陰性症状や抑うつ症状などは社会的転機と関連しているにもかかわらず、陽性症状と比して、臨床心理学的な研究の少なさや介入法が確立されていないことなどを共有し、今後も統合失調症のクライエントの QOL 向上のために研究をすすめていく気持ちをより一層強めることができました。

発表者の興味・関心から、精神病に関するシンポジウムに多く参加しましたが、印象に残ったのは、不眠と精神病症状との関連でした。不眠が陽性症状の悪化と関連があることがデータで示された上で、入院中に不眠に対する認知行動療法を実施した介入研究の精神病症状の改善効果が報告されていました。まだ、実施し始めとのことで、今後も追試を行なっていくとのことでした。BABCP に参加して最も感じたことは、何かを主張する際には、問題提起の理由、問題の検討法、問題に対する回答が明確なだけでなく、主張の limitation を踏まえた上での臨床的示唆を全ての発表者が報告していたことです。つまり、どの研究者・臨床家も自身の実践・研究の限界を吟味した上で、報告をされていました。上記のこととは当たり前のことであるかもしれません、自身の研究を振り返った際に、上記手続きの甘さを実感することもあり、今後は研究や臨床に取り組む際、もしくは報告する際に上記事柄を踏まえた取り組みを心がけていこうと思っています。

また、イギリスに初めて訪れましたが、イギリスの方々の日常生活や文化などに少し触れ、家族や友人などのプライベートな時間を大事にする彼らの生活スタイルを知ることができました。そして、数日の滞在ではありましたが、その中で「Hi? How are you?」など見知らぬ外国人にも挨拶をいただける対人関係のあり方に非常に温かみを感じることができました。

最後になりますが、発表助成をいただく事により、日頃の研究の成果を国外で発表し、討論する事ができました。貴重な機会を与えていただいた貴学会の支援に心より感謝申し上げます。

1 この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。

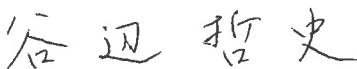
国際会議等参加旅費補助金報告書

2018年3月7日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

東京大学大学院 人文社会系研究科 博士課程

氏 名 谷辺哲史  

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 19th Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology (アメリカ・パーソナリティー・社会心理学会第19回年次大会)
公式ホームページURL	http://meeting.spsp.org/
開催期間	2018年3月1日～2018年3月3日
旅行期間	2018年2月28日～2018年3月4日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hyatt Regency Atlanta, Atlanta, GA, USA (アメリカ合衆国、ジョージア州アトランタ、ハイアットリージェンシー・アトランタ)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	谷辺哲史、唐沢かおり（東京大学大学院人文社会系研究科）
発表題目 ※正式名と日本語訳	Responsibility Judgments toward Traffic Accidents by Autonomous Cars (自動運転車による交通事故に関する責任判断)
補助金額	80,000円（内訳：航空券代 113,050円の一部として）

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度、申請者は The Society for Personality and Social Psychology (SPSP) 年次大会への参加および研究発表を行うにあたり、日本心理学会より旅費補助を頂きました。記して感謝し、以下に活動内容をご報告します。

【学会概要】

SPSP はアメリカ合衆国における、パーソナリティ心理学・社会心理学領域の学会である。毎年 2 月～3 月頃に年次大会を開催している。本年の年次大会は 2018 年 3 月 1 日から 3 日にかけて、ジョージア州アトランタにて開催された。1 日は専門分野ごとに企画されるプレカンファレンス（本年は感情、正義と道徳、ジェンダーなど 29 分野）が行われた。2 日と 3 日は、シンポジウム、ワークショップ、ポスター発表が行われた。

【活動成果】

1. 自身の研究発表について

申請者は、3 月 2 日午後 2:15～3:30 のポスター発表セッションにて発表を行った。発表内容は自動運転車による事故に対する責任判断に関する調査結果で、①事故の原因を人工知能（AI）に帰属すると、自動車を開発したメーカーへの責任帰属が促進されること、②擬人化傾向（人工物に人のような心があると感じる傾向）が強い人は、原因帰属とは無関係に、メーカーに大きな責任を帰属する傾向があることを報告した。

オーディエンスからは、本研究と将来の社会制度との関連や、機械の設計に関する指針といった応用的な観点からコメントを多く頂いた。しかし自身の知識不足のために十分に議論できなかつた点もあり、このような研究を海外で発表するにあたって、国ごとに異なる法制度や文化的背景にも精通しておく必要があると痛感した。

2. 他の発表・学会プログラムへの参加について

本学会はパーソナリティ心理学・社会心理学に関する非常に広範囲にわたるテーマで研究発表が行われ、参加者も米国内のみならず、日本を含む世界中から多数の研究者が参加していた。そのため、自身の研究とは異なるテーマや、日本とは異なる社会的背景にもとづく研究に多く触れることができた。

申請者は、初日は「The Psychology of Media & Technology」のプレカンファレンスに参加した。SNS 利用に関する調査や AI に対する信頼といった、新技術のもつ社会的影響に関する研究から、AI 技術によるデータ解析の新手法を用いた研究まで多様な研究が発表された。近年の AI ブームを反映してか会場は満席で、質疑応答も活発になっていた。なお、申請者は本補助金の申請内容とは別に、プレカンファレンス内でもポスター発表を行った（タイトル：Mind Perception toward Robots and Moral Behaviors）。

2 日目・3 日目は興味のあるシンポジウムにいくつか出席する他は、時間の許す限りポスター発表を見るようにした。AI に判断を委ねる場面での道徳ジレンマ問題など、興味を引かれる発表をいくつも見ることができた。国内学会では参加者の顔ぶれがある程度把握でき、見に行く発表を事前に決めてしまうことが多いが、本学会は非常に大規模であるため、会場を回るだけで興味深い研究に出会うことができ刺激的だった。

1 この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 8月 21日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科
ヒューマン・ケア科学専攻
氏 名 大井 瞳



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 2017th conference of the International Society for Research on Emotion (国際感情学会 2017年度大会)
公式ホームページURL	http://isre2017.org/
開催期間	2017年 7月 26日 ~ 2017年 7月 29日
旅行期間	2017年 7月 25日 ~ 2017年 7月 31日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Chase Park Plaza, St. Louis, States of America アメリカ合衆国, セントルイス, ザ・チェイスパークプラザ
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	大井 瞳 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) 望月 聰 (筑波大学人間系)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Low cognitive load causes ruminative thought: Experimental study of thought sampling method 認知的負荷の低さが反すう思考を生じさせる: 思考サンプリング法を用いた実験
補助金額	80,000円 (内訳:航空費 150,440円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびは、国際会議等参加旅費補助金を助成いただきましたことを、心より感謝申し上げます。以下に、活動内容および本学会への参加により得られた成果について報告いたします。

【活動内容】

2017年7月26日から7月29日にアメリカ合衆国のセントルイスで開催された The 2017th conference of the International Society for Research on Emotion に参加した。本学会は、感情研究に関する学際的な学会であり、様々な文化圏、研究領域で行なわれた研究のシンポジウムおよび研究発表が行なわれていた。申請者は、7月27日の11:30~12:30のセッションにおいて、ポスター発表を行なった。

【成果】

1. 自身の研究発表について

発表題目は、“Low cognitive load causes ruminative thought: Experimental study of thought sampling method (邦訳：認知的負荷の低さが反すう思考を生じさせる：思考サンプリング法を用いた実験)”であった。今回の発表内容は、実験課題の認知的負荷が課題中の反すう思考に与える影響について検討した実験の結果を報告したものであった。具体的な内容は、実験課題の認知的負荷が低い群と高い群を設定し、実験課題中にどの程度反すう思考が生じていたかを思考サンプリング法を用いて検討したという実験研究である。実験の結果、認知的負荷の高い群よりも低い群において反すう思考が多く報告された。

ポスターセッション中は、国外の研究者がポスターを訪れ、実験デザインについてのコメントや反すうへの対処法についてのコメントなど、様々な面からの意見をいただいた。特に、実験デザインについてのコメントは自身の実験デザインを見直すきっかけとなり、今後の研究に大きく活かせるように感じられ、有意義なポスター発表であった。

2. その他の研究発表

ポスターセッションで発表されているポスターの数は比較的少ないようと思われたが、会場には数多くの研究者が訪れており、活発な議論が繰り広げられていた。発表内容としては、恐怖、怒り、妬みといった感情そのものを扱った研究から表情や注意バイアスを扱った研究まで多様であった。また、ペーパーセッションでは、感情の発達や感情の性差といったテーマの発表が行なわれていた。ペーパーセッションにおいても、終了時間まで活発な議論が行われていた。なかでも、特に感情制御やうつ病といった臨床的応用を含んだテーマの発表は、自身の研究テーマと関連する部分があり、非常に興味深く拝聴した。このような臨床的応用を含んだ研究は自身の研究テーマを発展させるうえで重要な視点であるように感じられた。全体を通して、本学会への参加によって幅広いテーマの研究動向を知ることができた。

国外の学会に初めて参加し、国外で研究発表を行うことへの意欲強く感じる機会となりました。また、自身の英語能力の乏しさを痛感し、英語によるコミュニケーションをより円滑にするなど伝えるスキルも向上させたいと感じました。今回の学会参加により得られた貴重な経験を今後の研究活動に活かし、今後も国外での発表を行なっていきたいと考えております。
誠にありがとうございました。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年9月5日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

大阪大学大学院人間科学研究科
博士後期課程2年

氏 名

武藤 拓之



□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 11th International Conference on Cognitive Science (第 11 回認知科学国際会議)
公式ホームページ URL	http://iccs2017.conf.tw
開催期間	2017年9月1日～2017年9月3日
旅行期間	2017年8月31日～2017年9月4日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	台灣, 台北, 集思台大會議中心 (台湾, 台北, 国立台湾大学 GIS コンベンションセンター)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	武藤 拓之 ^{1,2} ・松下 戰具 ¹ ・森川 和則 ¹ (¹ 大阪大学大学院人間科学研究科・ ² 日本学術振興会)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Holding heavy bags in hands improves mental rotation performance in females but not in males (重い鞄を両手に持つと女性の心的回転成績が向上する)
補助金額	50,000 円 (内訳 航空運賃 21,580 円と宿泊費 31,510 円の一部として。)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度の The 11th International Conference on Cognitive Science (以下 ICCS2017)への参加及び研究発表に際し、貴学会より国際会議等参加補助金の助成を頂きましたことに、心より感謝申し上げます。ICCS2017 の内容について以下にご報告させて頂きます。

申請者の発表について

申請者は大会 3 日目 (9月 3 日) のポスターセッションで、「Holding heavy bags in hands improves mental rotation performance in females but not in males (日本語訳：重い鞄を両手に持つと女性の心的回転成績が向上する)」という演題の研究発表を行いました。申請者は空間認知の身体性に関する研究を行っていますが、今回の研究では、両手に重い鞄を持つことによって心的回転の成績が変化するか否かを検証することを目的としました。実験では、40名(男性 20名・女性 20名)の実験参加者が、両手に手提げ鞄を持った状態で心的回転課題を遂行しました。参加者の半数(男女 10名ずつ)は 0.22 kg の軽い手提げ鞄を両手に 1 つずつ持ち、残りの半分の参加者は 3.22 kg の重い手提げ鞄を両手に 1 つずつ持って課題を行いました。実験の結果、女性では重い鞄を持った群において、軽い鞄を持った群よりも、高角度条件の反応時間が有意に短くなりました。一方、男性では鞄の重さによる違いは認められませんでした。この結果は、接近行動をしながら心的回転課題を行うと女性の心的回転が速くなるという先行研究の知見 (Jansen, Kaltner, & Memmert, 2016) と整合しています。これまでの数多くの研究で、心的回転と手の運動が処理を共有しているという知見が報告されてきましたが、本研究の結果は、そのような心的回転の身体化プロセスが男女によって異なる可能性を提起しています。

その他の発表について

ICCS2017 は、心理言語学、認知神経科学、社会的認知、認知心理学、ロボティクスといった様々な視点から認知科学の探求に迫る、極めて学際的な大会でした。このようにバラエティに富んだ研究発表の中で、申請者にとって特に興味深かった研究は、Yen-Ting Lin 氏と Hui-Chen Hsiao 氏による「Spatial language and cognition across adult lifespan: Taiwan as a test case」という口頭発表でした。彼女らは、使用する言語と年齢が空間認知のスタイルに与える影響について実験的に検証しました。実験の結果、若年者よりも高齢者において、物体の空間的位置関係を表現する際に、自己中心の座標系 (egocentric reference frame) よりも環境中心の座標系 (allocentric reference frame) を用いる傾向が強まることが示されました。さらに、台湾語 (Taiwanese) 話者とマンダリン (Mandarin) 話者と両方のバイリンガルを比較した結果、台湾語話者よりもバイリンガル、バイリンガルよりもマンダリン話者において、環境中心の座標系を用いる傾向が強まることが示されました。また、GLMM を用いた分析によって、年齢の効果と言語の効果がそれぞれ独立に空間認知のスタイルに影響を与えるということも示されました。言語の効果には、言語の地理的分布や社会的・文化的要因が強く関連していると考えられます。結果が非常に明瞭で、空間認知の研究者である申請者にとっては非常に印象深い研究内容でした。

学会の雰囲気について

ICCS2017 は、規模としては比較的小さめの学会でしたが、口頭セッション・ポスターセッションとともに、ディスカッションがフランクに行える雰囲気で、研究者同士の交流を深めるのに適した場でした。また、Coffee / Tea Break と Welcome Reception の時間帯にはロビーで台湾料理やお菓子などが振る舞われ、台湾文化を楽しみながら研究者たちと親睦を深めることができました。

1 この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 9月 12日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期課程 1年
氏 名 印

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 12th biennial conference of Asian Association of Social Psychology (第12回アジア社会心理学会大会)
公式ホームページURL	https://auckland.asiansocialpsych.org/
開催期間	2017年 8月 26日 ~ 2017年 8月 28日
旅行期間	2017年 8月 24日 ~ 2017年 8月 29日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	New Zealand, Auckland, Massey University Albany Campus (ニュージーランド, オークランド, マッセー大学アルバニーキャンパス)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	大工 泰裕 (大阪大学大学院 人間科学研究科) 釘原 直樹 (大阪大学大学院 人間科学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Forewarning is effective only when it is remembered: Reconsidering the effect of forewarning to cause real-world resistance to persuasion (予告は想起されたときのみ効果を得る: 現実世界の説得への抵抗を生み出すための予告の効果の再検討)
補助金額	80000円 (内訳 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者への The 12th biennial conference of Asian Association of Social Psychology 参加の旅費について助成をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。以下、本大会での発表概要および成果についてご報告いたします。

【活動報告】

2017年8月26日から28日にかけて、ニュージーランド、オークランド、マッセー大学アルバニーキャンパスにて開催された The 12th biennial conference of Asian Association of Social Psychology に参加した。ニュージーランド、しかも都市部からやや離れた大学での開催ということもあり、参加者が例年より少ないようであった。しかし、その分コンパクトな学会となり、フィリピン、インドネシア、中国などアジアの社会心理学者と密な交流を行うことができた。毎日シンポジウム、ポスターセッション、口頭発表があり、申請者は3日目の12:30~13:30に開催されたポスターセッションで発表を行った。発表と同時にランチが提供され、カジュアルな雰囲気の中、発表を行うことができた。

【発表成果】

1. 自身の研究発表について

申請者の研究内容は、振り込め詐欺の被害者の多くが手口を知っているのに騙されているという事実を踏まえ、その原因を解明するものであった。振り込め詐欺の手口の広報啓発を、社会心理学における予告 (forewarning) と捉え、予告は効果を持つとしたメタ分析の結果 (Wood & Quinn, 2003) と、現実には広報啓発を受けているにも関わらず騙されるという事実との矛盾の解消を試みた。

そこで、申請者が着目したのは、「予告の想起」という概念であった。従来の予告研究においては、予告の中にこれから説得を受ける旨が含まれているために、予告を想起する必要がなかった。このことが、研究知見と現実との矛盾を生み出していると考え、予告を純粋な知識を与えるものに変えることによって、予告を思い出さなければならない状況を作り出し、予告の想起がどのようなときに行われるのかということを検討した。仮説として、精緻化見込みモデル (Petty & Cacioppo, 1986) における中心ルートが活性化されたときのみ予告が想起され、効果を持つと考えて実験を行った。

その結果、仮説が支持されており、中心ルートが活性化されたときのみ予告の効果がみられた。このことから、現実において手口を知りながら詐欺被害に遭うのは、予告を思い出す際に、タイム・プレッシャーなどの影響で周辺ルートでの情報処理が行われているからであることが示唆された。

この研究発表に関しては4人の研究者が質問に訪れた。特に、インドネシアの博士課程学生は説得研究が専門ということもあり、精緻化見込みモデルに関して有用な議論を行うことができた。その方とは名刺交換も行ったため、今後も交流を行う予定である。

2. 他の研究発表について

小規模ではあるが、様々な分野の発表があったように思う。特に、日本人が多く発表していた印象を受けた。発表の中でも特に気になったものは、文楽人形を使って人間らしさの知覚を検討していた研究であった。動きのスムーズさがウォームスの知覚に貢献しているという結果は、ロボットなどをいかに人間らしく見せるかという工学的な発展も期待できるものであると感じた。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 6月 8日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 甲南大学大学院人文科学研究科
博士後期課程

氏 名 大浦 真一



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 15 th European Society for Traumatic Stress Studies Conference 第15回欧州トラウマティック・ストレス学会
公式ホームページURL	http://estss2017.eu/
開催期間	2017年6月2日～2017年6月4日
旅行期間	2017年5月31日～2017年6月7日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	University of Southern Denmark, Odense, Denmark (デンマーク・オーデンセ・南デンマーク大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	大浦真一(甲南大学大学院人文科学研究科)・ 松尾和弥(甲南大学大学院人文科学研究科)・稻垣 勉(長崎大学 ^{※1})・ 島 義弘(鹿児島大学)・福井義一(甲南大学) <small>※1 申込時の所属、現在(2017年6月)は鹿児島大学</small>
発表題目 ※正式名と日本語訳	Relationships between childhood abuse and explicit/implicit internal working models of attachment: Using Implicit Association Test (被虐待経験と愛着の顕在・潜在的内的作業モデルの関連 —シングルターゲット潜在連合テストを用いた検討—)
補助金額	80,000円(内訳 航空券の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、本発表を国際会議参加旅費等の補助に採択して頂き、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。自身の研究成果の発表やシンポジウムへの参加など非常に貴重な経験を積むことができました。以下に大会概要と発表概要および成果についてご報告いたします。

【大会概要】

本大会は、2017年6月2日～6月4日までデンマークのオーデンセにある南デンマーク大学で開催された。今大会のテーマは“Child maltreatment across lifespan”であり、このテーマに関する発表が多く見られたが、それ以外のトラウマに関する様々な研究成果も発表された。主なカテゴリーとして、子ども虐待、仕事に関するトラウマ、難民、トラウマ反応、トラウマ治療といったものがあった。

【発表概要】

申請者は、大会2日目に「被虐待経験と愛着の顕在・潜在的内的作業モデルの関連－シングルターゲット潜在連合テストを用いた検討－」というタイトルでポスター発表を行った。

現在の虐待研究は、調査協力者の過去のトラウマ体験を質問紙を用いた回顧的な方法で測定している。しかしながら、一般に2,3歳以前の記憶は想起が困難であると言われていたり、解離によって健忘されたりすることもあり、自記式尺度だけで正確に測定できているか疑問が残る。そこで、本研究では、虐待と密接な関連があると思われる愛着との関連を顕在（意識）面と潜在（非意識）面から検討した。今回、被虐待経験と愛着の顕在面の測定には質問紙、潜在面の測定には潜在連合テストの一つであるシングルターゲット潜在連合テストを用いた。分析の結果、愛着の顕在面は回顧された被虐待経験と正の関連（愛着の顕在面が不安定であるほど、被虐待経験を多く報告）するのに対し、愛着の潜在面は回顧された被虐待経験と負の関連（愛着の顕在面が不安定であるほど、被虐待経験を少なく報告）することが分かった。本研究の結果、愛着の潜在面から被虐待経験の自己報告を見た場合、過去の被虐待経験を正確に報告していない可能性が考えられた。以上の結果と考察について、参加者と議論を行った。

【成果】

ポスター発表を通して

本研究で用いた潜在連合テストは主に社会心理学で使用されている手法である。今回の発表を通して、トラウマ研究において潜在連合テストの利用可能性を発信できたことは一つの成果である。実際、潜在連合テストの興味を持ってくださった参加者も多く、説明の際には日本語版の潜在連合テストのデモンストレーションを行った。ただし、今回の結果は追試をしていく必要があるのも事実である。潜在連合テストの実施形態（今回は集団で実施）や調査スケジュール（潜在連合テストの実施と質問紙調査はそれぞれ別日に行った）の条件を整えて再検討をしていく必要がある。

シンポジウム等への参加を通して

海外では、トラウマに関する臨床研究も積極的に行われていることや、調査研究においても潜在クラス分析など日本のトラウマ研究の中ではほとんど用いられていない分析手法を用いて研究を行っていた。自身は臨床心理士でもあるため臨床実践も行うが、今回の参加を通して、研究手法もさらに磨いていく必要性を感じた。

【謝辞】

本大会での発表を通して自身の研究成果を発信でき、さらに自身の研究結果の今後の方針について参加者と有意義な議論をすることができました。また、海外のトラウマ研究を肌で感じることができました。今後はいっそう研究に邁進していく所存です。このような貴重な経験を積む機会を与えてください、厚く御礼申し上げます。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2018年 3月 16日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 京都大学大学院 教育学研究科

修士課程 1回生

氏 名

高野 了太



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 19th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology 第19回 パーソナリティ・社会心理学会
公式ホームページ URL	http://meeting.spsp.org/2018/
開催期間	2018年 3月 1日 ~ 2018年 3月 3日
旅行期間	2018年 2月 28日 ~ 2018年 3月 5日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA, Georgia, Atlanta, Hyatt Regency and Marriott Marquis (アメリカ、ジョージア州、アトランタ、 ハイヤット・リージェンシー及びマリオット・マーキス)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	京都大学大学院教育学研究科 修士課程 1年 高野 了太
発表題目 ※正式名と日本語訳	The Dark Side of Awe: From the Perspective of Intergroup Conflict 畏敬の念の功罪－集団間葛藤の観点から－
補助金額	80,000円 (内訳 航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は報告者の国際学会参加及び研究発表に対し、貴学会より国際会議等参加旅費補助金を頂戴したことを、心より感謝いたします。以下に活動概要と、参加・発表による成果を報告いたします。

活動内容

アメリカ合衆国ジョージア州アトランタにて、2018年3月1日から3日にわたって開催された The 19th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology に参加した。1日目は Preconference が開かれ、進化心理学や文化心理学など様々なテーマごとにシンポジウム・ポスター発表が行われた。報告者は、Evolutionary Psychology の Preconference に参加した。2日目、3日目はその他のシンポジウムに加え、口頭・ポスター発表を行われた。報告者は”The Dark Side of Awe: From the Perspective of Intergroup Conflict”という題目で、2日目に約90分間ポスター発表を行った。

成果

1. 自身の研究発表

発表内容は、満天の星を見つめたときなどに感じる畏敬・畏怖という感情が、利己性や攻撃性などの反社会的行動を促進する可能性について検討したものであった。先行研究では、畏敬・畏怖が利他行動や謙虚な行動を促進することが明らかにされているが、その負の側面に着目した研究はほとんどない。そこで本研究は、畏敬・畏怖が社会的行動に与える影響の個人差に焦点を当て、その個人差を支える心理学的要因を探った。その結果、保守主義的な個人は、畏敬・畏怖を感じても利他行動が促進されないことが明らかとなった。保守的な態度を有する個人は、脅威に対する感受性が高いことが示されているため、畏敬・畏怖を喚起する刺激から脅威を感じ取った可能性が示唆された。

発表では、畏敬・畏怖の研究を行っている研究者はもちろん、その他多くの研究者に話を聞いてもらうことができた。本研究の意外性が評価されたようで、「着眼点がクールで大変面白い」「ポジティブな側面の研究は多くあるが、こういったダークサイドの研究も重要だ」といった意見をいたくことができた。加えて、「再現は可能か」「サンプルサイズはこれで十分か」「次に研究を行うとしたらどうするか」といった視点からの質問も受け、改めて本研究を見つめなおすことができた。時間の制約上、深い議論はできなかったが、多くの方に自分の研究を知ってもらう良い機会であった。

2. 他の研究発表

1日目の Preconference では、ステレオタイプが生じるプロセスを進化的観点から明らかにする研究などの発表を聞き、自身の研究と照らし合わせ、進化心理学的にどのような説明が可能かなど、新たな視点を得ることができた。また、2日目・3日目のポスターセッションでは、同じ畏敬・畏怖に関する研究がいくつか発表され、非常に興味深い内容を聞くことができた。シンポジウムにおいても、道徳や規範に関するセッションに参加し、研究の着眼点や方法論に関して、自身の研究においても生かすことができそうな話を聞くことができた。

最後に

この度は、報告者の国際学会への参加旅費補助金を与えてくださった日本心理学会、ならびに選考委員の先生方に心より御礼申し上げます。今回得た貴重な経験を今後の研究活動に活かし、より一層精進して参りたいと存じます。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 9月 11日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院教育学研究科
博士後期課程 2年

氏 名 太田 絵梨子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 17th Biennial conference of the European Association for Research on Learning and Instruction (EARLI2017) 第17回ヨーロッパ教授学習学会
公式ホームページ URL	https://earli.org/earli-2017
開催期間	2017年 8月 29日 ~ 2017年 9月 2日
旅行期間	2017年 8月 28日 ~ 2017年 9月 4日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The University of Tampere, Tampere, Finland フィンランド・タンペレ市・タンペレ大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	太田 絵梨子 (東京大学大学院教育学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	How can teachers promote children's effective learning strategy use while doing Kanji homework? 漢字の宿題における有効な学習方略使用を促すための教師の指導
補助金額	80,000円 (内訳 航空券代 128,110円の一部として) ※申請時は航空券代 171,210円との見積もりでしたが、 実費が上記金額へと変更になりました。

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、EARLI2017への参加にあたり、国際会議等参加旅費補助金の申請を採択して頂きましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

以下、当該会議での活動内容および成果についてご報告致します。

(1) 会議概要

本会議は、European Association for Research on Learning and Instruction が 2 年に 1 回開催している国際学会であり、第 17 回目にあたる今回の大会では、世界各国から約 2,000 人にわたる教授・学習研究者が集まりました。期間中は、キーノート・スピーカーによる講演やシンポジウム、口頭発表、ポスター発表などが行われ、様々な立場から活発な議論がなされていました。

発表の内容としては、教育学や心理学等の理論や知見をベースにしながらも、より実践的なアプローチで行われた研究成果が数多く発表されており、国際的にも理論と実践の結びつきが強まっていることを肌で感じました。

(2) 自身の研究発表について

8月31日の12:00～13:30に、「How can teachers promote children's effective learning strategy use while doing Kanji homework? (邦訳：漢字の宿題における有効な学習方略使用を促すための教師の指導)」という題目でポスター発表を行いました。本発表では、「とにかく繰り返しやるしかない」と思われるがちな漢字学習に焦点を当て、形骸化した反復練習に陥っている日本の子供達の家庭学習の実態を明らかにしました。その上で、認知主義的な立場から見た学習方略という視点から、教師がどのような指導や支援を行っていくべきかについて、具体的な実践研究のデータを用いながら論じました。出席者からは、「日本の教師は学習方略という発想をどのくらい持っているか」といった質問が出されるなど、各国の教師教育の実態について活発な意見交換がなされました。



▶ ポスター発表前の様子

(3) 会議への参加状況

自身の研究関心でもある宿題(homework)の研究発表が行われたセッションを中心に参加しました。特に、9月1日の午前中に行われたシンポジウム「Homework: Parental assistance and children's academic outcomes」では、宿題における親の関わりというテーマで4つの研究発表がなされ、興味深い知見が数多く紹介されました。ディスカッションでは、宿題研究における今後の展望について議論がなされ、量的側面(どれだけやったか)だけでなく質的側面(どのようにやるか)を見過ごしてはならない旨が述べられました。また、いくら親の関わり方を改善したとしても、宿題のタスクそのものが苦痛なものであつたら意味がないことから、教師の指導・支援のあり方についても合わせて検討が必要である旨も強調されました。これらの視点は、私自身の研究関心とも合致するものであり、改めて国際的に研究成果を発信していく必要性を感じさせられました。

それ以外にも、様々なセッションに参加して積極的に質問をしたり発表者とコミュニケーションをとるなどして、充実した時間を過ごすことができました。今回の経験を生かし、今後さらに自身の研究活動の質を向上させられるよう、引き続き精進してまいりたいと思います。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年9月8日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

博士課程後期課程

氏 名

雲財 啓



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	18th European Conference on Developmental Psychology ヨーロッパ発達心理学会 第18回大会
公式ホームページURL	http://www.ecdp2017.nl/
開催期間	2017年8月29日～2017年9月1日
旅行期間	2017年8月29日～2017年9月1日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Netherlands, Utrecht, Dom Church オランダ, ヨトレヒト, ドム教会 (申請時点での開催会場 (Utrecht University) から より詳細な会場へと記載事項を変更致しました。)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	雲財 啓・齊藤 誠一 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Inhibitory influence of reminiscence on Sense of Coherence 首尾一貫感覚への回想の抑制効果
補助金額	80,000円(内訳 旅費交通費の一部)

- 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議参加報告書

この度は、18th European Conference of Developmental Psychologyへの参加にあたり国際会議等参加旅費補助金を頂きましたことを、心より厚く感謝申し上げます。以下の通り、学会での活動内容及び得られた成果を報告させて頂きます。

【活動内容】

2017年8月29日～9月1日にかけて、オランダ・ユトレヒト・ドム教会で開催された18th European Conference of Developmental Psychologyにおいてポスターの第一著者として参加した。本学会は2年に1度開催される学会であり、初日はプレ・ワークショップが開催され、2日目から最終日にかけて基調講演、シンポジウム、口頭発表、ポスター発表などが行われた。また、それぞれのプログラムの間には研究倫理や研究方法に関するセッションも行われており、研究者間で活発に意見を交換し合っていた。発表日時は8月30日（2日目）15時15分～16時15分であり、発表題目は「Inhibitory influence of reminiscence on Sense of Coherence（邦訳：首尾一貫感覚への回想の抑制効果）」であった。

【得られた成果】

1. 発表に関連して得られた成果

発表内容は過去の回想の質と量が首尾一貫感覚に与える効果についてであった。具体的には、大学生を対象に実施した調査において、過去を再評価することは首尾一貫感覚の中の1つの要素を高める一方、単純に過去を思い出すことは同じ要素を低めるという結果が階層的重回帰分析により示されたというものであった。

セッション中は国内外の研究者が訪れ、尺度項目や発表内容の背景要因について有意義な議論を行った。尺度項目については、報告者も懸念していたことと同様の内容の指摘であり、このことについてより詳細に検討する必要があることを確認した。背景要因については、人格特性を具体例に挙げて議論を行った。この議論は今後の研究における新たな視点となるものであり、次の研究へのモチベーションを上げてくれた。また、国外の研究者との英語でのやり取りは国際学会ならではのものであり、有意義な経験になった。

2. その他の学会参加により得られた成果

発表以外では口頭発表やシンポジウムを中心に参加した。報告者にとっては初めての国外での国際学会であり、発表や発表後の質疑応答を実際に目にすることはよい経験になった。また、交流のある研究者が口頭発表する場に参加し、英語での質疑応答の難しさを目当たりにした。報告者の英語力ではポスター発表において身振り手振りを交えながら自分の気持ちや主張をかろうじて伝えることできる程度であり、国際学会で発表したり人脈を広げたりするためにも、もっと英語力を身につける必要があることを強く感じた。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年7月17日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学人間科学研究科博士前期課程1年

氏 名

小林勇輝



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	13 th Asia Pacific Conference on Vision (第13回アジア太平洋視覚会議)
公式ホームページURL	http://apcv2017.conf.tw/site/page.aspx?pid=901&sid=1134&lang=en
開催期間	2017年7月13日～2017年7月17日
旅行期間	2017年7月14日～2017年7月16日 (申請時から参加期間を短くしました)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	台湾・台南市・国立成功大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小林勇輝(大阪大学)・松下戦具(大阪樟蔭女子大学)・森川和則(大阪大学)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Enhanced saturation contrast caused by saturation gradients. (彩度グラデーションによって引き起こされる彩度対比の強化)
補助金額	50,000円(内訳 航空券、学会参加費)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、日本心理学会による補助により、Asia Pacific Conference on Vision（以下APCV）においてポスター発表ができましたことを心より感謝申し上げます。以下にその概要を記します。

【APCVについて（栗木（2013）を参考）】

APCVは、アジア太平洋地域の視知覚研究者が一堂に会し、その研究成果について議論を交わす国際会議である。2001年の発足当初はAsian Conference on Vision（ACV）として、中国・韓国・日本の3か国を中心に行なってきたが、その範囲は台湾やシンガポールへと徐々に拡大し、オーストラリアが参加するようになって以降は、Pacificを加えたAPCVとして会議が開かれてきた。第13回となる今回は台湾の台南市において開催され、台湾・中国・オーストラリア・日本などの地域から多くの研究者が参加した。

心理学全般において言えることであるが、「視知覚研究の本場」はやはり欧米と言って差し支えないだろう。これはAPCVの発足が2001年であるのに対して、ヨーロッパ視知覚会議（European Conference on Visual Perception）の発足が1978年と23年も早く始まっていることからも明らかである。しかしながらAPCVの発足はアジア地域の視知覚研究者コミュニティの形成に大きく寄与し、アジアの研究者が費用・時間といった面で大きなコストを払うことなく海外の研究者と議論を交わす場として機能している。

【発表内容】

Agostini and Galimonte (2002)は、明るさの対比効果が輝度のグラデーションによって強化されることを報告した（図1）。本研究は同様の対比効果強化現象が、彩度の対比と彩度のグラデーションにおいても起きるかどうかを調べた。調整法を用いた実験では、彩度のグラデーションに囲まれた領域では彩度の対比効果が強まることが確認され、グラデーションによる効果が彩度次元でも起きることが示された（図2）。

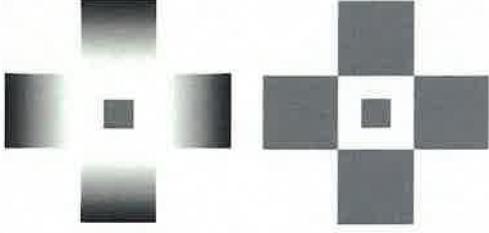


図1 Agostini and Galimonte (2002)が用いた刺激。中央のパッチは、グラデーションに囲まれた左の图形の方が暗く見える。

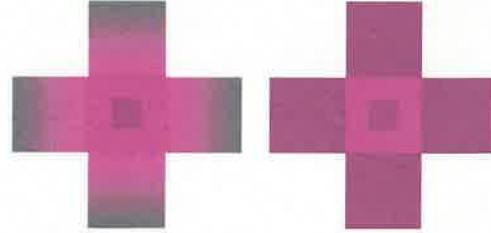


図2 本研究で用いた刺激。刺激は彩度のみが操作され、輝度はどの点においても同じであった。グラデーションのある左の图形ではパッチがややすく見えてくる。

【所感】

自分の発表に関して有益なコメントを得ることができたと同時に、海外の先進的な研究に触ることができ、国際学会らしい収穫を得たと感じている。短い滞在ではあったが、自らの研究意欲を十分に刺激してもらった。

また、日本の研究者も数多く参加しているAPCVという場は、いい意味で「国内学会と国際学会の中間」的な立ち位置にあると感じた。国際学会という場でありながら、日本人研究者とも多く触れ合うことができ、今後につながるコネクション形成のきっかけとできたと思う。今回このような機会を与えてくださった本助成金ならびに日本心理学会に心より感謝したい。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017 年 12 月 2 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 慶應義塾大学社会学研究科

氏 名 田仲 祐登



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	2017 Society for Psychophysiological Research Annual Meeting 2017 年度 生理心理学会大会
公式ホームページ URL	http://www.sprweb.org/
開催期間	2017 年 10 月 11 日 ~ 2017 年 10 月 15 日
旅行期間	2017 年 10 月 9 日 ~ 2017 年 10 月 16 日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hofburg, Wien, Republik Österreich オーストリア・ウィーン・ホーフブルク王宮
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	田仲 祐登 ¹ , 伊藤 友一 ² , 柴田 みどり ³ , 寺澤 悠理 ² , 梅田 聰 ² ¹ 慶應義塾大学社会学研究科, ² 慶應義塾大学文学部, ³ 慶應義塾大学先導研究センター
発表題目 ※正式名と日本語訳	FEELING CHANGES OF INTERNAL BODILY STATE DURING EMOTIONAL RECOGNITION: AN ERP AND HEP STUDY 感情認識時における身体内部の変化の知覚：事象関連電位と心拍誘発電位を用いた検討
補助金額	80,000 円 (内訳 航空券代の一部として使用させていただきました)

- 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、日本心理学会による国際会議等参加旅費補助金に採択していただき、 2017 Society for Psychophysiological Research Annual Meeting に出席、発表させていただけたことに、厚く御礼申し上げます。以下、活動内容およびその成果について、ご報告させていただきます。

【活動内容】

1. 自身の研究発表

申請者は、心拍、呼吸、といった身体内部の感覺である内受容感覺と感情認識に関わる脳波研究について発表した。内受容感覺は感じやすさの個人差の研究が主に行われているが、申請者の研究では、内受容感覺を意識的に感じたときとそうでないときの事象関連電位と心拍誘発電位（HEP）を比較することで、感情を認識するような場面において内受容感覺が与える影響を検討した。身体の変化が感じられた際には、注意を反映するとされる脳波のP300の振幅が小さくなり、注意が身体と情動刺激で分割されていることが確認された。また、後期陽性成分(LPP)の振幅が、内受容感覺を意識的に感じた際に大きくなかったことから、内受容感覺を感じることにより、情動をより感じるようになると考察した。さらに HEP の振幅が身体に変化があったときとなかったときで異なっていたことから、心臓からの求心性信号が、感情認識と関係があることが示唆された。

研究の結果について、さまざまな方と建設的な議論を行い、意見をいただくことができた。特に多かった疑問として、実際の自律神経反応との関係があるのかどうか、というものがある。本研究では内受容感覺の有無により R-R 間隔の違いがなかったことから、自律神経反応による違いはなかったと考察した。しかし、心電図の強さがどうなっているか、他の自律神経反応との関係はどうかというご指摘をいただいたことから、他の指標を使っての比較が必要だと感じた。さらに、内受容感覺の個人差との関係についても尋ねられた。今回の研究では個人差による違いは見られなかったものの、今後の研究への課題であり、検討していきたいと答えた。また、今後の展望についてどのように考えているか、という質問をいただくことも多く、研究へのモチベーションにつながった。

2. 発表以外の大会への参加

自分の発表以外にも、シンポジウムやほかの方のポスター発表にも参加した。シンポジウムでは、うつや不安といった、内受容感覺と関係のある精神疾患について、情動との関係を調べた研究や、脳波を使った研究についてのシンポジウムに参加させていただいた。また、Early Career Award Address の発表は脳と心臓の相互作用について調べられており、研究内容は今度の参考になるものであった。ポスター発表では、感情的な涙についての発表や、内受容感覺と動脈圧受容器反射の関係についての研究など興味深い発表が多く、いくつかのポスターについては質問も行った。

特に印象に残っているものとして、SPECIAL INTEREST LUNCH と呼ばれるイベントがあった。私が参加させていただいたのは、Can You Feel the Beat? The Study of Interoception in Affective, Social, and Cognitive Science というセッションであり、約一時間半、内受容感覺の研究について、15人ほどのグループで話し合いを行った。論文では普段現れてこないような専門的な細かい議論、例えば研究の手法の問題や、内受容感覺の定義の問題について、さまざまな意見を伺うことができ、また、自分の考えを発言するなどして、非常に有意義な体験をすることができた。さらに、このイベントに来てくれた方が申請者のポスターに足を運んでくれたり、逆に申請者がその方のポスターに伺うことがあったりと、世界中の研究者と交流を図ることができ、貴重な機会を得ることができた。

【補助金の使用状況】

補助を頂いた 80,000 円につきましては、東京＝ウィーン間の航空券旅費 105,120 円の一部として全額使用させていただきました。

1 この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 8月 4日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科

氏 名

神野 雄



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	International Society for the Study of Individual Difference 2017 国際個人差学会 2017年度大会
公式ホームページURL	http://issid2017.org/
開催期間	2017年 7月 24日 ~ 2017年 7月 28日
旅行期間	2017年 7月 23日 ~ 2017年 7月 29日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Poland, Warsaw, University of Warsaw (ポーランド, ワルシャワ, ワルシャワ大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	神野 雄 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Predictors of various responses to imagined infidelity in Japanese undergraduates: Examining the roles of stress and commitment to relationship (日本人大学生における架空の浮気場面に対する反応の規定因について —ストレスと関係へのコミットメントに着目して—)
補助金額	80,000円 (内訳 宿泊費・航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【はじめに】

このたびは、報告者が International Society for the Study of Individual Difference 2017（以下、ISSID2017 と略記）へ参加するにあたりまして、日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金を頂戴しました。助成して頂いた日本心理学会ならびに関係者の皆様に、心より御礼を申し上げます。今回の国際会議への参加に際して学んだこと、経験したことは今後の報告者の研究人生に大きく貢献するものとなると考えられます。以下に補助金の使用状況、および国際会議の参加における成果につきましてご報告いたします。

【補助金の使用状況】

補助金の 80,000 円は航空券＋宿泊費の合計 211,822 円の一部として全額を使用した。

【成果】

1. ポスター発表

報告者はポスター発表の形式で発表を行った。Predictors of various responses to imagined infidelity in Japanese undergraduates: Examining the roles of stress and commitment to relationship（日本人大学生における架空の浮気場面に対する反応の規定因について—ストレスと関係へのコミットメントに着目して—）というタイトルで、発表は 7 月 27 日木曜日、現地時間で 18 時 30 分から 20 時 30 分の間に行われた。本研究は大学生の恋愛関係において、実際に現在恋人がいると回答した 112 名に対する質問紙調査の結果を報告するものである。個人がもし自分の恋人に実際に浮気されたと考えた場合に取りうる反応・行動として（本研究では刺激として第三者とのデート場面を提示した）、「攻撃志向」「別れ志向」「対話志向」「ライバル志向」「沈黙志向」の 5 種の行動が神野（印刷中）により仮定されている。本研究の大きな目的は、それら各種の行動は関係変数としての関係へのコミットメントと、個人変数としてのストレス反応にどの程度影響されるのかについて、統合的に検討・確認することであった。

本研究は 2 時間の発表時間を通して 10 名程度の海外の研究者に向けて報告者から説明がなされ、活発なディスカッションを行うことができた。同じ研究を他の国で行えはどうなると思うかという問い合わせに対しては報告者が明確な答えを返すことができなかつたため、今後の課題である。一方、報告者の拙い英語力でも、項目例を明示するハンドアウト等を併用したことによってか研究の概要是理解して貰った上でのディスカッションを進められたことは一応の収穫としたい。

2. 他の研究発表

報告者は他の研究発表にも積極的に参加した。Dr. Buss の”The Evolution of Sexual Morality”に関する発表やその他、自らの専門分野に近い領域の最前線の研究者の発表を聞けたことや、同じく国際会議に参加した若手の日本人研究者との積極的なコミュニケーションができたことは、今後の報告者にとってのかけがえのない経験となったと考えられる。

【最後に】

人間の性行動・恋愛行動などについて、本会議では比較的多くの研究発表がなされており、国内で行われている研究の潮流とは幾分違った流れを感じることが多くありました。今後の報告者の研究において今回の経験を活かし、心理学全般に還元していくことで今回の助成への恩返しをできればと考える次第でございます。今回のような機会を与えて頂きまして誠にありがとうございました。

1 この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 6月 28日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 甲南大学大学院人文科学研究科

氏 名 松尾 和弥



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 15th European Society for Traumatic Stress Studies Conference 第15回欧州外傷性ストレス学会
公式ホームページURL	http://estss2017.eu/
開催期間	2017年 6月 2日 ~ 2017年 6月 4日
旅行期間	2017年 5月 31日 ~ 2017年 6月 7日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Denmark, Odense, University of Southern Denmark デンマーク, オーデンセン, 南デンマーク大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松尾和弥 ¹ ・大浦真一 ¹ ・島 義弘 ² ・稻垣 勉 ³ ・福井義一 ⁴ ¹ 甲南大学大学院人文科学研究科, ² 鹿児島大学, ³ 長崎大学, ⁴ 甲南大学文学部
発表題目 ※正式名と日本語訳	Effects of Childhood Abuse and Internal Working Models of Attachment on Emotion recognition of faces: Examined by manipulating strength of expressions (被虐待経験と愛着の内的作業モデルが表情の情動認知に及ぼす影響—表情の表出強度を操作した検討—)
補助金額	80000円(内訳 航空券代)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびは、国際会議等参加旅費補助に採択いただき、国際会議への参加および発表の機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。以下、活動内容ならびにその成果について報告させていただきます。

【活動報告】

2017年6月2日～4日、デンマークの南デンマーク大学にて開催された「第15回欧州外傷性ストレス学会 (The 15th European Society for Traumatic Stress Studies Conference)」に参加した。報告者は、6月3日のセッションにて、「被虐待経験と愛着の内的作業モデルが表情の情動認知に及ぼす影響—表情の表出強度を操作した検討—」のタイトルでポスター発表を行った。その他、小児期の逆境体験が成人期以降のPTSD症状に及ぼす影響に関するシンポジウムなどに参加した。

【成果】

1. ポスター発表

報告者の研究発表は、子ども時代に受けた虐待と愛着の内的作業モデルが表情の情動認知に及ぼす影響を検討するものであった。虐待などの不適切な養育を受けてきた人々は、否定的な表情の読み取りに優れている反面、他の表情の読み取りが不正確であることが知られている。本研究発表では、虐待と非常に関連が強い愛着の内的作業モデルも同時に使用し、表情の情動認知に及ぼす影響をより詳細に検討することを目的としていた。分析の結果、被虐待経験は否定的な表情に対する情動認知の正確性を高めていたものの、不安定な愛着の内的作業モデルの一側面は、多くの表情に対する情動認知の正確性を低下させていた。つまり、被虐待経験と愛着の内的作業モデルでは、表情の情動認知に及ぼす影響が大きく異なる可能性が示唆された。ポスター発表の時間では、何人かの先生方に見ていただき、英語にて研究内容を説明する機会があった。思うように説明できず、歯がゆい思いになる場面も多々あったが、母国語ではない言語で説明する機会は、研究の中心的な要素を端的に説明する訓練にもなり、非常に良い経験となった。

2. その他の研究発表を聞いて

David Fergussonは、虐待に対する早期のアプローチを目指した実践的研究を行っており、これは臨床と研究が上手く絡み合っていた。臨床と研究の両立を目指す報告者にとって、非常に興味深い研究であったため、当該研究発表を聞くことができ、大いに刺激を受けた。また、その他の研究発表を聞く中で、新たな分析手法を学ぶことができた。従来の虐待研究では、虐待を受けた頻度やその種類などが主な研究対象となっていた。だが、本学会の研究発表では、それらに加えて、虐待を受けていた期間も同時に考慮することができる分析手法が提案され、使用されていた。虐待の影響をより精緻に検討する上で、上記のような分析手法を習熟することが必須であると報告者は感じ、今後も研究を洗練させていくためのヒントを得ることができたと考えている。

【附記】

海外の研究の最前線に触れ、研究についての英語を用いたコミュニケーションを体験し、今後の研究と英語コミュニケーションスキル獲得のモチベーションがとても高まりました。大変得難い良い経験となったと考えております。助成して頂いた日本心理学会ならびに学会関係者の方々に厚く御礼申し上げます。本大会での経験を今後の自身の研究活動に活かし、より一層精進いたします。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 9月 6日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学大学院教育発達科学研究所
心理発達科学専攻

氏 名 松井一裕



□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	XXIIInd International Congress of Rorschach and Projective Methods ロールシャッハ及び投影法の国際会議
公式ホームページURL	http://www.rorschachparis2017.org/jp
開催期間	2017年7月17日～2017年7月21日
旅行期間	2017年7月16日～2017年7月23日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	France · Paris · Les Cordeliers フランス・パリ・レ・コルドリエ
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松井一裕 ¹⁾ ・森田美弥子 ¹⁾ ・坪井裕子 ²⁾ 1) 名古屋大学, 2) 名古屋市立大学
発表題目 ※正式名と日本語訳	Associative processes and interpersonal cognitions expressed in Rorschach responses of synthetic drug users 危険ドラッグ乱用者のロールシャッハ反応例から見た連想家庭と対人認知
補助金額	40,000円(内訳 渡航費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【概要】

フランスのパリにある、レ・コルドリエにて、2017年7月17日から21日にかけて、XXIIInd International Congress of Rorschach and Projective Methods（第22回国際ロールシャッハ及び投影法学会大会）が開催された。参加者は、開催国であるフランスだけでなく欧州各国やアメリカ、アジアやオセアニアから、投影法に関する様々なテーマごとに、口頭発表やポスターセッションが設定されていた。発表者は“Associative processes and interpersonal cognitions expressed in Rorschach responses of synthetic drug users” のタイトルで発表を行った。

【発表報告】

1. 申請者の研究発表

発表内容は、日本で流行が見られた危険ドラッグを使用した者に対して、実施したロールシャッハ法の事例報告を行った。名大法のシステムを用いたところ、感情面では不安感情の高い点が示唆され、思考面からは恣意的な思考の傾向や知覚や連想過程の障害が疑われた。しかし、思考過程は自閉的な水準には達しておらず、精神病圏のプロトコールよりも、思考は重篤なレベルには至っていなかった。これらの点をポスター発表したところ、参加者からは、名大法のスコアのどのような点に薬物依存の問題が反映されているかとの質問があり、議論を行った。今回問題としたスコアの説明が不十分となってしまい、英語力のなさを痛感したが、問題に強く興味を持っている参加者より質問を受けたことで、自身の研究領域への関心が海外でもあることを確認できた。

2. 申請者以外の研究発表

薬物関連障害の投影法をテーマに扱った発表者も参加しており、日本語圏では報告自体が稀であるテーマの発表を知る機会となった。一部の発表は残念ながら英語以外の言語で行われ、ディスカッションの内容が理解できない場面もあったが、このようなテーマで投影法のセッションがあること自体が驚きであり、改めて世界と日本の薬物の蔓延状況の差を感じた。薬物問題のある当事者だけでなく家族歴とTATの反応を詳細に検討する発表もあり、包括的に人間を理解しようとする流れや、他の障害との比較を行っている研究も見られた。それぞれの研究者の所属する文化圏で流行している薬物が研究に反映されており、我が国の情勢や特殊性を考慮して研究を行うことが重要であると改めて認識した。

【謝辞】

International Congress of Rorschach and Projective Methodsへの参加にあたりまして、日本心理学会より国際会議等参加費補助金をいただきましたことを、心より厚く感謝申し上げます。国際会議の参加により、国内ではあまり発表のなされない、薬物問題をはじめとする海外の研究者の貴重な発表を聞く機会に恵まれました。この機会を通じて得られた経験をもとに、自身の研究を深めていき、微力ながら学術・実践的な研究報告を還元できるよう、努めていきたいと思います。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年11月10日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学人間科学研究科
臨床死生学・老年行動学博士後期課程1年
氏 名 蔡 羽淳



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	15 th SPS SGP SSP Conference (第15回スイス心理学会)
公式ホームページURL	https://www.ssp-sgp2017.ch/cms/home
開催期間	2017年09月04日～2017年09月05日
旅行期間	2017年09月02日～2017年09月17日 (学会終了後、ローザンヌ大学の研究室を訪問するため、帰国時間を延長した)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Switzerland · Lausanne · University of Lausanne スイス・ローザンヌ・ローザンヌ大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	蔡羽淳 ¹ , 権藤恭之 ¹ , 安元佐織 ¹ , 小園麻里菜 ¹ , 石岡良子 ² , 豊島彩 ¹ ¹ 大阪大学, ² 慶應大学
発表題目 ※正式名と日本語訳	The influence of physical capacity on subjective well-being among Japanese oldest old 身体機能が主観的幸福感に及ぼす影響—日本の超高齢者を中心に—
補助金額	8万円（内訳 航空券代の一部）

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度、15th SPS SGP SSP Conference での研究発表にあたり、貴学会より国際会議参加旅費補助を頂きましたことに心より感謝申し上げます。以下に大会概要および参加・発表による成果をご報告致します。

【大会概要】

スイスのローランヌ大学において、2017年9月4日から2017年9月5日にかけて開催された15th SPS SGP SSP Conferenceに参加致しました。特別講演、シンポジウムおよびポスターセッションが開催されました。また、Cambridge University の Susan Golombok 教授が、“Modern families: Parents and children in new family forms”という題目で特別講演を行いました。報告者は一日目の4日に“The influence of physical capacity on subjective well-being among Japanese oldest old”という題目でポスター発表を行いました。

【申請者の発表】

本発表では、日本の超高齢者を対象とした身体機能が低下することで主観的幸福感に影響を及ぼすことについての検討を報告致しました。本研究の着目点では、日常生活動作（Activities of live, ADL）を基にして、90歳低機能群、90歳中高機能群、100歳低機能群および100歳中高機能群に層別して、年齢とADL、さらにその交互作用が主観的幸福感（PGC モラールスケール）に影響するかについて分析を行いました。結果は、両年齢群の間に有意差は見られませんでした。つまり、超高齢者は身体機能が低下するにも関わらず、主観的幸福感を維持していることが示唆されました。一方で、下位尺度の心理的動搖においては、年齢の主効果が見られました。100歳群は90歳群より心理的側面に穏やかに適応していることを示唆する結果でした。さらに、孤独感・不満足感においては、ADLの主効果が見られました。超高齢期に入ると、身体機能の衰えが始まって、ソーシャルネットワークの縮小、友人や家族との死別などで超高齢者にネガティブな感情をもたらしたことが影響していました。この点に対して、ソーシャルサポートを増やして、他者との交流を促進することで、主観的幸福感を高めることができると考えられます。

【特別講演で学んだこと】

Susan Golombok 教授の特別講演を拝聴致しました。同性愛のカップルで育ってきた子どもには5つの親がいる可能性があります。つまり、精子と卵子のトナー、代理母、ゲイおよびレズビアンの両親という形で伝統的な家庭の組み合わせに新たな基準を加えたと言えます。しかし、同性両親は子どもに出生の背景を伝えることで親子関係を維持することが困難になるケースがあり、開示することが難しい現状があります。さらに開示するタイミングを決定することも困難を極めています。子どもが1歳の時、同性両親が事情を開示するつもりの比率は卵子をもらったほうは56%であり、精子をもらったほうは46%がありました。一方で、子どもが7歳の時、同性両親が事情を開示するつもりの比率は卵子をもらったほうは39%であり、精子をもらったほうは29%がありました。つまり、子どもが大きくなればなるほど出生背景の開示は減少すると考えられます。ドナーによって、子どもを産むことはもう一つの問題点があります。それは子どもが知らないうちに、兄弟がどんどん増えていくことです。この講演を聞いて、現在の同性愛に関する現状と困難さをより一層深く理解できました。

海外の学会に参加することで、海外の学者と交流することができ、自分の研究も紹介でき、非常に貴重な機会をいただきました。最後になりますが、貴学会からこの機会を頂いて、誠にありがとうございました。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2018年03月21日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 京都大学大学院
人間・環境学研究科
博士課程2回生
氏 名 TAYLOR Pamela

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Society for Personality and Social Psychology Annual Convention
公式ホームページURL	http://meeting.spsp.org/2018/
開催期間	2018年03月01日～2018年03月04日
旅行期間	2018年02月22日～2018年03月05日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hyatt Regency Hotel アメリカのジョージア州のアトランタ市
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	ティラー・パメラ TAYLOR Pamela
発表題目 ※正式名と日本語訳	①Differences in the Structure of the Small Self in Awe versus Horror (Emotion Preconference) ②Appraisals of Responsibility and Control: Fate in Awe, Chance in Horror (Main Convention)
補助金額	80,000円(内訳 往復航空券代 81,740円、ホテル代\$626.17の1部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者が The 19th Annual Convention of the Society of Personality and Social Psychology (SPSP) に参加するにあたり、日本心理学会国際会議等参加旅費補助金をいただきました。厚く御礼申し上げます。以下、参加学会について報告いたします。

【学会概要】

The Society for Personality and Social Psychology's (SPSP) Annual Convention is the premier international event for more than 3,800 social and personality psychologists. Attendees from academia, non-profit organizations, government, and the private sector present and discuss research, network and collaborate on projects, and pursue professional development while advancing science and pedagogy in the field. This year's convention was held March 1-3 at the Hyatt Regency in Atlanta, Georgia, USA.

【活動報告】

On the first day of the convention, I attended the Emotion Preconference, spending the day learning about new research in the field of emotion studies. Of particular use for my own research was a presentation given by Molly Crocket (Yale) on how online media outlets facilitate moral outrage by lowering personal costs and increasing personal benefits.

On the second day, I attended several symposia, as well as a workshop on conducting Drift Diffusion Modeling. One important symposia called “Psychological Insights from Language”, where I saw a talk by Jonah Berger (University of Pennsylvania) on “Atypicality and Cultural Success”, which gave me an idea for a study that I would like to conduct in Japan disproving his hypothesis that atypicality determines cultural success outside individualistic cultures.

On the third day, I attended many symposia, including one on mixed method research, which was very valuable to me, as it indicated a way to do a factor analysis on coded qualitative textual data.

【発表報告】

At the convention, I presented two posters. On March 1st, I presented a poster at the Emotion Preconference entitled, “Differences in the Structure of the Small Self in Awe versus Horror”. This poster reported the results of my studies that showed the phenomenological experience of having a “small self” is not unique to awe, but also occurs in the emotion of horror as well. I also showed that the experience of the small self, while present in both awe and horror, shows qualitative differences in the two emotions, being a combination of negative self-diminution and a positive sense of smallness relative to a larger power in awe, but only self-diminution in horror.

On March 2nd, I presented another poster entitled “Appraisals of Responsibility and Control: Fate in Awe, Chance in Horror” during the 12:45-14:00 poster session. This poster discussed my research findings comparing agentic attributions to nonmaterial forces (e.g., fate, chance) during experiences of awe and horror. The results indicated that people make appraisals to change for horrifying experiences, but appraisals to fate for awe-inspiring experiences. Further, I presented data indicating that the relationship between perceptual vastness and belief change following experiences of awe is fully mediated by appraisals of fate in awe.

During both poster sessions, I was able to discuss my research with other researchers conducting similar research, especially researchers in awe. This experience was very valuable, as I was able to learn about new scales being used.

1 この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2017年 8月 12日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 法政大学大学院人文科学研究科

氏 名 喜入 晓



□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The International Society for the Study of Individual Differences 2017 Conference (個人差の国際学術会議 2017)
公式ホームページ URL	http://issid2017.org/
開催期間	2017年 7月 24日 ~ 2017年 7月 28日
旅行期間	2017年 7月 24日 ~ 2017年 7月 30日 (申請書では7月28日までとしていましたが、学会日程の都合上、7月29日発、7月30日着の便に変更しました。)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Poland, Warsaw, Warsaw University (ポーランド・ワルシャワ・ワルシャワ大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	喜入 晓 (法政大学大学院人文科学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Dark Triad, mate retention behavior, and intimate partner violence. ダークトライアド、配偶者保持行動、パートナーへの暴力
補助金額	80,000円 (内訳 宿泊費と航空券代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

2017年7月24日～28日にかけて、ポーランド・ワルシャワ大学で開催された The International Society for the Study of Individual Differences 2017 Conference に参加した。この学会は、パーソナリティおよびその個人差に関する研究を中心とし、心理学だけでなく行動遺伝学、生物学など様々な分野の研究者が集う学会である。自身のポスター発表では、進化心理学的アプローチによる、パーソナリティ (Dark Triad) とパートナーへの暴力との関連について発表した (2017年7月25日)。

【成果】

1. 自身の発表

申請者の発表では、パートナー暴力 (intimate partner violence: IPV) のメカニズムを進化心理学的アプローチにより明らかにすることを試みた。IPVは、進化的機能として、パートナー関係を維持するための行動であるという指摘がある。また、パートナー関係維持行動およびIPVには、パーソナリティとして Dark Triad パーソナリティ (社会的に望ましくないとされる3つのパーソナリティ) が影響することが指摘されている。これらを踏まえ、申請者の研究では、Dark Triad の各特徴がパートナー関係維持行動に影響し、また、それを媒介して IPV に影響するという仮説を検証した。質問紙法による調査と分析の結果、Dark Triad のうちサイコパスがパートナー関係維持行動の一つである同性ライバルへのネガティブな関わりを予測し、また、それを介した IPV への間接効果を示した。

申請者の発表には、Dark Triad に関する研究を第一線で行なっている研究者をはじめ、様々な研究者に興味を持っていただいた。また、多くの有益なご意見をいただいた。これらは主に、1) Dark Triad の各特徴から潜在因子として Dark Triad の核を抽出した研究の必要性、2) Dark Triad 特徴の独自性に対する進化的基盤の考察、3) Dark Triad とパートナー関係維持行動、IPV の個人差に関する進化的基盤へのアプローチである。申請者はこれらを踏まえ、現在、追加の解析を実施中である。

2. その他の研究発表

今回の学会では、進化心理学の発展に大きく貢献した研究者がキーノートスピーカーとして参加した。テーマは、パーソナリティに対する進化的アプローチにおける道徳性の重要性と、性差へのアプローチの重要性についてであった。進化心理学的アプローチをする中で、性差は重要であるということが指摘される一方で、多くの研究では性差そのものにアプローチするのではなく、性別を統制変数として扱うなど、性差は補助的に扱われてきた。その点について、今回の学会におけるキーノートレクチャーでは考えを改めさせられ、そのような意味で、大変有益な学会であったと考えている。また、様々なシンポジウムを通して、Dark Triad と関連するパーソナリティ、Dark Triad の進化的基盤、Dark Triad を含むパーソナリティの行動遺伝学的研究についての最新の知見を勉強することができた。特に、申請者が研究テーマとして扱う Dark Triad とその進化的基盤の一つとして想定できる生活史戦略理論に関するシンポジウムでは、理論的背景から演繹的に導かれる仮説に対する文化横断的な実証研究についての最新の知見が発表された。Dark Triad の進化心理学的アプローチとその最新の実証研究は、申請者にとってきわめて有益な情報であり、研究の幅を広げることができると考えている。

【最後に】

今回の学会では、研究発表による有益な成果だけでなく、休憩時間や懇親会を通して国外の多くの研究者と様々な有益な議論を交わすことができ、より幅広い視点をひらくことができた。このような機会を与えていただいた、日本心理学会の関係者の皆様には、深くお礼申し上げます。本学会で得られたことを活かし、研究活動に努めます。

1 この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2018年 4月 29日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院教育学研究科
博士課程2年
氏 名 福田麻莉



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 17th Biennial conference of the European Association for Research on Learning and Instruction (EARLI) (第17回ヨーロッパ教授・学習研究学会総会)
公式ホームページURL	https://www.earli.org
開催期間	2017年 8月 29日 ~ 2017年 9月 2日
旅行期間	2017年 8月 27日 ~ 2017年 9月 3日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Finland · Tampere · University of Tampere, (フィンランド・タンペレ・タンペレ大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	福田麻莉 (東京大学大学院教育学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Students' textbook strategy use: Effects of utilizing textbooks in mathematics class (学習者の教科書利用方略：数学の授業における教科書活用の効果)
補助金額	80,000円 (内訳 航空券代 127,990 の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は EARLI2017 への参加にあたり、国際会議等参加旅費補助金をいただきましたことを心より御礼申し上げます。

以下、本会議における活動内容および得られた成果についてご報告いたします。

1. 会議の概要

本会議は、European Association for Research on Learning and Instruction (EARLI) によって隔年で開催される国際会議であり、第 17 回はフィンランドのタンペレ大学にて開催された。期間中は、キーノートスピーカーによる講演やシンポジウム、ポスター発表等が行われ、教授学習分野の基礎研究だけでなく、学校現場での実践研究に関する発表も盛んであるという印象を受けた。また、キーノートスピーカーの発表には国の教育カリキュラムに関する話題もあり、本学会が教育心理学という研究領域の中に閉じず、実践に生かすという志向性が高いことが感じられた。

2. 自身の研究発表について

8月30日8:30～10:00のセッションにて、ポスター発表を行なった。発表題目は「*Students' textbook strategy use: Effects of utilizing textbooks in mathematics class*」であった。本発表の内容は申請者の修士論文の一部であり、家庭学習中のつまずき場面で教科書を活用するという学習方略を中学生に獲得させることを目指して実施した実験授業について、特に参加者の自主学習場面での学習行動や、学業成績の変化に関するデータの報告を行なった。

発表中は様々な参加者からコメントをもらいながら議論を行った。議論においては、学習方略の獲得のために行った足場かけの更なる工夫や、実験授業で取り上げた学習単元の妥当性といった申請者の研究の内容だけでなく、国による教科書の違いと教科書の持つ機能の違いについても議論をすることができ、今後の研究を進めていく上でのヒントを得ることが出来た。また、数学教育や自己説明の研究を行っている Vanderbilt 大学の Rittle-Johnson 教授と自身の研究内容や研究領域の動向について議論することができ、研究アイデアを先行研究に位置付けていく上での新たな視点が得られた。

3. 学会への参加状況

5日間を通じて、キーノートスピーカーによるトークやシンポジウム、ポスター発表において、学習方略の利用を促進したり、学習成果を高めるための授業デザインや課題のあり方等に関する最新の研究動向を知ることが出来た。

特に、シンポジウムでは、申請者の研究内容と関連の深い研究を行なっている Poitiers 大学の Rouet 教授によるマルチ文書の読解に関する研究や、Vanderbilt 大学の Rittle-Johnson 教授による自己説明研究の最新レビューを聞き、今後の自身の研究の進め方や、研究のオリジナリティの出し方について考えを深めることができた。どちらも、論文を読むだけでは得られなかった、それぞれの研究者が研究を行う上で持っている教育に対する考え方や志向性などを感じ取ることができ、自分自身の今後の方向性について改めて考える機会となった。

今回参加した国際学会は、自身の研究の内容面だけでなく、オリジナリティやアピールポイントについて再考する良い機会となりました。また、国際学会に参加することでしか得られない研究者との新たなつながりを得ることができました。大会参加への助成をいただきましたことを、改めて御礼申し上げます。

1 この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。